

ぐに褐色、楕円形～不整形円形、1 cm 大の病斑を多数生じ、のちやや凹み、病斑上に微小黒点を多数形成、湿潤時に淡橙色の分生子塊を溢出する。罹病部からは *Colletotrichum* 属菌が高率に分離され、分離菌の噴霧接種によりトウガンに原病徴が再現し、接種菌が再分離された。本菌はキュウリ、スイカにも病原性を有したが、ウリ科以外の7科7種の野菜などには発病を認めなかった。分生子は円筒形～長楕円形、両端円頭、大きさ $9.5 \sim 19 \times 4 \sim 6 \mu\text{m}$ (平均 14.5×4.8)、付着器は棍棒形～やや不規則形、 $8 \sim 15 \times 5 \sim 7 \mu\text{m}$ (10.1×5.9)。形態と宿主範囲(ウリ科のみ)は Sutton (1980) による *Colletotrichum orbiculare* (Berk. & Mont.) Arx の記載と合致した。また、rDNA ITS 領域の塩基配列も同種と 100%一致した。以上より病原菌を *C. orbiculare* と同定した。病名をトウガン炭疽病 (Anthracnose) (新称) としたい。

(神奈川農技セ・*東京農総研・**東大院農)

(39) 築尾嘉章・伊藤陽子・松下陽介・住友克彦 沖永良部島で発生したキク立枯症状の病原(病原追加) Chikuo, Y., Ito, Y., Matsushita, Y. and Sumitomo, K.: Causal pathogens occurred on Chrysanthemum (*Chrysanthemum morifolium*) damping-off found in Okinoerabu island. 2007 年7月下旬に鹿児島県和泊町(沖永良部島)の直挿し栽培のコギク圃場において発生した立枯症状の病原を調査した。定植後約1ヶ月の苗(本葉3~7枚程度)に発生し、症状は従来の立枯病やピシウム立枯病、フザリウム立枯病と区別し難い。常法により病原菌を分離したところ、病斑部からは複数の *Rhizoctonia* 属菌と *Pythium* 属菌が分離された。分離菌を土壌ふすま培養しそれぞれ単独でキク苗に接種すると、いずれの菌も原病徴が再現され、接種菌が回収された。形態分類と r-DNA-ITS 領域の塩基配列による分類を併用したところ、*Pythium* 属菌は高温性の *aphanidermatum* 及び *helicoides* と同定された。また *Rhizoctonia* 属菌は二核の *Rhizoctonia* と *R. solani* の両者が存在し、前者は菌糸融合と分子診断の結果から AG-A と AG-F と同定された。以上の結果から本キク立枯症状は複数の病原菌による disease complex と考えられた。これら病原菌のうち *P. aphanidermatum* は千葉県で既報だが、病名目録未記載なのでピシウム立枯病に、また AG-F は立枯病にそれぞれ病原追加したい。(花き研)

(40) 中山喜一・景山幸二・*渡辺秀樹**・福田 充・石川成寿 *Pythium spinosum* および *P. sylvaticum* によるイチゴピシウム根腐病の発生(病原菌追加) Nakayama, K., Kageyama, K., Watanabe, H., Fukuda, T. and Ishikawa, S.: Occurrence of *Pythium* Root Rot of Strawberry Caused by *Pythium spinosum* and *P. sylvaticum*. 2007 年5月上旬、栃

木県那須塩原市のイチゴほ場で、主に下葉の葉柄が小豆色に変色し生育の停滞や萎凋枯死する病害が発生した。罹病株の根は黒色～暗褐色水浸状に腐敗し、クラウンにも病徴の進展が認められた。そこで、病斑部から常法により病原菌を分離したところ、2種の *Pythium* 属菌が高率に分離された。接種により原病徴が再現され、接種菌が再分離された。このうち1種は、不整形の Hyphal swelling を形成し、蔵卵器には長さ約 $5 \mu\text{m}$ の指状の棘があり、同菌糸性の蔵精器が1~3個付着し、卵胞子はほぼ充満性であった。もう1種は、球形またはレモン形の Hyphal swelling を形成し、有性器官は単独培養ではほとんど形成されないが、*P. sylvaticum* の雌株との対峙培養により形成された。これらの形態的特徴および rDNA ITS 領域の塩基配列の相同性検索の結果から、前者を *P. spinosum* Sawada、後者を *P. sylvaticum* Campbell & Hendrix と同定した。イチゴピシウム根腐病の病原菌には *P. helicoides* が既に報告されており、本病の病原菌として *P. spinosum* および *P. sylvaticum* を追加したい。

(栃木農試・*岐大流域研セ・**岐阜農技セ)

(41) 岡田清嗣・瓜生恵理子・*景山幸二**・草刈眞一 ナデシコ「テルスター」およびペチュニアに発生した立枯病(新称) Okada, K., Uryu, E., Kageyama, K. and Kusakari, S.: Occurrence of Damping-off on Dianthus cv. Telstar (*Dianthus chinensis* L. \times *D. barbatus* L.) and Petunia (*Petunia* \times *hybrida* Vilm.) Caused by *Pythium myriotylum* Drechsler in Japan. 2007 年6~9月、大阪市の花壇苗生産農家においてナデシコ「テルスター」およびペチュニアのセル苗およびポット苗の地際部の茎や下葉の基部が軟化腐敗し、黄化や萎れ、立枯症状を示し枯死する症状が発生した。病斑部には卵胞子が観察され、極めて生育の速い無隔壁の白色菌糸を有する菌が分離された。ナデシコおよびペチュニア分離株をそれぞれの宿主株元に灌注接種すると、病徴が再現され、病原菌が再分離された。両菌株の生育特性および形態は類似しており、10~40°C で生育し適温は35°Cであった。胞子のうは膨状で遊走子を形成し、造卵器は類球形、表面平滑、頂生で20~37 μm 、造精器は勾玉状で造卵器に2~7個着生し、異菌糸性であった。卵胞子は球形、非充満、帯黄色で20.2~29.3 μm であった。両分離株の rDNA-ITS 領域の塩基配列は同一であり、*Pythium myriotylum* と高い相同性(99.6~100%)を示した。これらの結果から、両菌株を *P. myriotylum* Drechsler と同定した。本菌によるナデシコおよびペチュニアの病害は未報告であり、本病をナデシコ「テルスター」立枯病(damping-off)、ペチュニア立枯病(damping-off)と呼称したい。(大阪環農総研・

*大阪中部農の普及課・**岐阜大流域研セ)